令和3年度 学校評価総括表

五條市立五條東小学校

	人とのつながりを大切に　一自ら未来を切り拓いていく児童の育成一	総合評価
運 営 方 針	○『CONNECT +PLUS～人をおもう、みんながつながる～』を合い言葉に、強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちに「予測不可能な時代を生き抜く力」を育てる。 ○ 保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。	B

令和2年度の成果と課題	本年度の重点目標	
○探究的な学習課題の設定や、思考ツールの活用により、自他の考えをつないで問題解決に取り組もうとする対話的と協働の学びを進めていくことができた。 ○挨拶運動の取組によって、大きな声で挨拶ができる児童が増えてきた。 ○統合によって拡がった校区に対応した新たなふるさと学習の体系を整え、児童が意欲的に活動する取組を進めることができた。 ○異学年交流等を取り入れた外遊び活動を実施することで、運動を積極的に楽しむ児童が増えている。 ●基礎基本の力を定着させるため、計算や漢字等、既習事項を振り返る時間を設ける。 ●小中一貫教育を見据え、中学校区連携のもとに教育活動の再構成や家庭学習習慣の定着を図る。 ●読書習慣に個人・学年間の差があるので、「図書室ボード」等を活用し、全体として取り組んでいく。 ●不登校や学校不適応傾向解消のため、集団づくりや外部機関との組織的連携を一層図っていく。 ●地域ボランティアの方々とのつながりを継続し、ふるさと学習年間計画を改善していく。 ●「スマホ・ゲームに費やす時間」「寝る時間」等、生活調べの結果が芳しくなかった項目について、家庭の協力を得ながら底上げを図っていく。 ●新しい生活様式に対応した運動の方法について検討し、実施していく。	○自分の考えをもち、生き生きと伝え合うための論理力を身につけさせる	知
	○見つけた課題に対し柔軟に考え発想する力を身につけさせる	
	○自他を大切にする心とふるさとを大切にする心を育てる	徳
	○みんなで力を合わせることの大切さを実感させる	
	○基礎体力の向上と運動習慣の定着をはかる	体
	○生活習慣の定着をはかる	

評価項目	具体的目標（評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
知	A 自分の考えをもち、生き生きと伝え合うための論理力を身につけさせる	「論理国語」のメソッドを活用し、文章の内容を論理的に理解させる指導を推進することで、児童の学力の向上、および、内容を正確に読み取る力を育成する。標準調査県平均以上を目指す。	B	B	B	研究授業を通して，「論理国語」の研究に学校全体で取り組むことができた。文章を論理的に読み取らせ，正確に内容を理解させる授業を行うことで，児童が言葉にこだわる姿が見られるようになった。全国学力・学習状況調査では県平均を上回ることができたが，「書く力」に課題が見られた。	・「論理国語」を通した教員の自己研修と授業改善の推進 ・やまびこ号で学年の一括借りを利用し、教室の近くに本をたくさん置く。 ・年度初めに精選した図書の活動を継続して行っていく。	・「論理国語」という新たな研究テーマを設定し、目標を定めて様々な工夫を凝らしながら取組を進めていることが分かった。論理的に思考したり、相手に分かるように伝えたりすることは、子どもたちの将来においてとても大切な能力である。しっかりと伸ばしていってほしい。
		各学級で読み聞かせを月に1回以上行ったり、読書教室の設置や本を身近に感じられる環境整備を行ったりすることで、本を読むことが好きな児童を増やす。読書が楽しいと答える児童90%以上を目指す。	B			月に1回の読み聞かせや、教室や廊下の読書環境の整備を行い、目標としていた90%には至らなかったが、87%の児童が読書を楽しいと感じることができた。コロナ禍で制限されたこともあり、その他の取組があまりできなかったことが課題である。		
	B 見つけた課題に対し柔軟に考え発想する力を身につけさせる	「教育目標達成のための手法」が活用できる場を学習活動の中に設定し、児童同士がつながりをもてる多様な探求型学習を意識的に推進する。	B	B		コロナ禍の制限がある中で，総合的な学習の時間を中心に，様々な場面で手法を取り入れながら探求型の学習を進めようとしていた。今後はルーブリック等を用い，指導と評価を一体化した取組へと深めていく必要がある。	・ルーブリックを用いた指導と評価の一体化 ・ふるさと学習を進めるための指標となる「ふるさと学習シート」の作成 ・ふるさと学習紀要を作成するとともに、研修を継続して行っていく。	
		総合的な学習の時間等の探究活動において、「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「表現・まとめ」のサイクルを意識した授業づくりを実践する。	B			年度初めに年間計画表の配布、および学習のサイクルに関する全体研修を実施してから、各学年が単元の計画を進めたため、「必然性」のある課題設定を意識して取組が進められていた。各学年の取組の交流がなかなかできなかったことが課題にあがった。		
徳	C 自他を大切にする心とふるさとを大切にする心を育てる	自他の個性や良さに気づき、大切に思う感性を育てるとともに、「傾聴」「対話」を大切にする取組を進め、周りから受け止められていると実感できる児童80%以上を目指す。	B	B	B	傾聴や対話を大切にする基礎として、「立腰」や「声のものさしシート」の配布、呼びかけにより学校全体で意識することができた。 自主学交流や異学年交流を通してまわりから受け止めてもらえる機会を育むことができた。レジリエンスやエンカウンター等研修の機会を持つことができたが、学級間での取組の共有では課題が残った。	・ふるさとに関係する児童アンケートのみ、3学期にも実施し、結果の分析を行う。 ・地域フィールドワーク研修 ・コロナ禍のために本年度見送った韮山小との交流、安生寺（追儺会）の学習を実施する。	・「CONNECT」の合い言葉の通り、子どもたち同士があたたかく繋がっているということがとても感じられる。学校統合に際し、そこに力を入れて取り組んでききたということが成果として現れている。 ・傾聴や対話の感覚やスキルを高めていくために、「立腰」や「声のものさし」といった、児童にとって具体的で分かりやすい手法を示して取り組んでいることが分かった。
		ふるさと学習の推進や、地域ボランティアの方々との持続的な関わりによって、児童が地域との繋がりを実感し、自分の住む地域を好きだと思う児童85%以上を目指す。	B			アンケートでは、概ね五條市のことを好意的に捉えている。（「知りたい」87%、「自慢したい」78%） また、各学年、ゲストティーチャーなど地域の人と繋がって学習が進められている。		
	D みんなで力を合わせることの大切さを実感させる	学級活動・学校行事・クラブ活動・委員会活動・集会活動などの学級内外の特別活動を充実させて協力することの大切さを実感させる。「クラスや他の学年の友達と力を合わせることは大切だと思う」と答える児童85%以上を目指す。	A	A		コロナ禍の中で活動が制限されることが多かったが、内容を工夫し、充実させることができた。アンケートの結果から、「力を合わせることが大切だと思う」と答えた児童を94%にすることができた。	・北小との統合に向け、児童をつないでいく活動を年間計画に位置づけ、継続して取り組んでいく。	
		日々の生活の中で人権について考える機会を意識的に設け、人権を大切にしようとする態度と実践力を身につけさせる。学校や学級が安心して思いや願いを出し合える場であると感じる児童80%以上を目指す。	A			毎月の人権デーの取組でテーマに沿って全校に問題提起をすることで、自分たちを取り巻く日々の生活を振り返ることができた。アンケートで「自分はまわりのみんなに大切にされていると思う」児童が87%と、楽しく安心して学校生活が送れていることが分かった。		
体	E 基礎体力の向上と運動習慣の定着をはかる	体力測定の結果をもとに児童の体力・運動能力の課題を明確にし、系統だった体力・運動能力向上に取り組む。その成果を再計測で数値化し、各学年5種目以上で全国平均を上回ることを目指す。	B	B	B	体力テストに向けて中学校の先生の事前指導や、縦割り班での体力テストで、下級生が上級生をお手本にして取り組めた。また、自分の結果をもとにランクアップ会を行うことで個々の課題に基づいた取り組みができた。各学年5種目以上で全国平均を上回ることはできていない。	・東っ子体操のリニューアルをする。 ・ハッスルキッズの内容を工夫し回数を増やす。	・運動能力テストでは目標値に達しなかったということだが、課題分析によって目標値を設定し、そこを目指して取り組んできたプロセスに価値があると思う。 ・生活習慣の確立には、保護者の理解と協力が不可欠。生活しらべによって見えてきた課題について、なぜ改善が必要であるのかを保護者と共有して取り組んでいけるよう、働きかけていってほしい。
		ハッスルキッズや外遊びチャレンジの実施など、運動能力や興味・関心に沿った課題を個々に持たせ、数値目標を設定して向上に向けて意欲を持って継続的に運動に取り組める場や機会をつくる。運動が好きだという児童85%以上を目指す。	A			ハッスルキッズを学期に1～2回、外遊びチャレンジを学期に1回取り組むことで運動に取り組める機会をつくった。運動が好きな児童は84%と目標には少し届かなかったが、コロナ禍で制限されることが多く外に出る機会も減ったなか概ね積極的に活動はできている。		
	F 生活習慣の定着をはかる	基本的生活習慣を確立するため、生活調べを活用して自分の生活習慣を振り返る機会を繰り返し持たせ、保護者の積極的な協力を得ながら、達成率85%以上を目指す。	B	B		保護者との連携により，年間を通して定期的に児童が生活を見直し，指導する機会を持つことができた。アンケートの結果から，今後はアウトメディアに関わる取組を進める必要がある。	・生活調べ実施の継続 ・保護者への啓発と連携 ・生活調べ事後指導の徹底	
		児童の気になる様子について全職員が共通理解をする機会を定期的（毎週終礼時）に持ち、組織的な対応ができる体制をつくることで、学校が楽しいと思う児童90%以上を目指す。	A			定期的な児童理解研修を全職員で通年実施することで，学校全体による生徒指導をすることができた。アンケート項目「学校で学んだり遊んだりすることが楽しい」において，肯定的回答97%を達成。		

今年度の成果と次年度への課題	【成果】 ・論理国語研究に取り組むことで言葉にこだわる児童の姿が見られるようになった。 ・総合的な学習の4つのサイクルを意識することで「必然性」のある課題を設定して取組を進めることができた。 ・異学年交流やエンカウンター等の取組によって「周りから受け止められている」「力を合わせることは大切だ」という情操を育むことができた。 ・ハッスルキッズや外遊びチャレンジ等、運動に楽しく取り組む機会を設け、意欲を高めることができた。 ・職員間で定期的に児童の課題を共有し、組織的に対応することで、ほとんどの児童が学校生活を肯定的にとらえるようになった。	【課題】 ・論理国語についての知見を深め、「読解力」の一層の向上を図っていく。 ・読書を楽しいと感じられる環境をより充実させていく。 ・ルーブリックを用いた指導と評価の一体化を進める。 ・各学年の取組について交流する機会を設定していく。 ・地域のフィールドワーク研修等を実施し、ふるさと学習の充実を図る。 ・保護者の協力を得ながら、アウトメディアへの取組を進めていく。